

～ セピア色の風景 ～

「秋の思い出」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

相馬の実家は、居宅や蔵の前を川が流れ、それをはさんで反対側には作業場や、わら小屋・牛小屋がありました。そして川の土手には、胡桃（クルミ）の大木が立っていました。

わが家の秋の年中行事に、「胡桃もぎ」がありました。今思えば、台風で実を落とされる前にと話していたので、時期は恐らく9月中旬ごろだったと思います。

その年中行事の特徴は、竹竿で地面に叩き落とした実はそのまま拾うのですが、大半は下を流れる川に敢えて落とすことでした。川に落とした実を下流側で川幅いっぱいに渡した竹竿でせき止め、それを網ですくい上げました。

もともと、下に川があつたから、そうせざるを得ない方法だったので、面白く極めて効率のいいやり方でした。胡桃の木を持たない近所の

羨望を受けながら、幼い私はたわなに実つた胡桃に収穫の秋を感じ、家族総出の作業に心が躍り、そして降り注ぐ胡桃の実の雨に、はしゃぎ回っていました。

一緒に胡桃もぎした祖父母はとうに亡く、父母に代わつて胡桃の大木が私を迎えてくれています。



秋の田園は、黄金色の絨毯に稲刈りによって四角の虫食いが日に日に広がり、最後のころは黄金色の島々が点在する風景に変わります。

今は刈り取られた稲穂だけが、即日農家の倉庫に運ばれますが、当時は刈られた田んぼで稲束のまま、つまり鎌で根元を刈られた茎のついた稲穂（両手で握れる程度に束ね、藁でぐるりと巻く）の状態で、天日乾燥しました。

天日乾燥の方法は地方によっていろいろですが、わが相馬地方はハセと呼ばれる木杭と竹で組まれた枠組みに、稲束をかけるのが一般的でした。

手伝い半分、遊び半分での辺を駆け回り回る青田少年は、そのハセに登るのが大好きで〇〇ほど高い所を好むなどという言葉も知らず、ハセの天辺（てっぺん）にまたがっていました。

時折、稲刈りの手を休め、曲げ通しの腰を伸ばす家族から「なにがめーっがー？（何か見えるか）」などと声をかけられる少年は、まっ平らな田園の向こうに次男故、家督にはならない自分の将来をぼんやりと眺めていました。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める